

## 第30回 現地研究会参加記 — 渡島地方の肉牛飼養を見学して —

左 久  
(帯広畜産大学)

大野町・七飯町の和牛繁殖農家を見学するという案内のあった今年度の現地研究会は、9月10、11日に行なわれ、約30名の会員が参加した。10日総会、11日見学で、公共育成牧場や法人組織の農場も含め4ヶ所を見学した。見学先は以下の通りである。

(午 前) 沢村農場 (大野町 向野)  
大野町公共育成牧場 (大野町 木地挽山)  
道南ファーム (鹿部村 駒見)  
(午 後) 山川牧場 (七飯町 大沼)

道南は水田稲作中心で、十勝や道東では畑作・酪農中心の農業が行なわれ、又、気候的には道内でもっとも温暖なところと、もっとも寒冷の厳しい地方というように、道南と道東の違いはたくさんある。こうした背景の違いが肉牛飼養にどのように反映しているかを見るのは興味あることであった。

湯の川から大野町の見学先に向うバスの中で、道南農試の清水専技により道南畜産の概況などの説明があった。残念ながら、乗用車でいった筆者はその話を聞けなかった。

配られた資料によれば、道南地方は乳牛、肉牛共に一戸当り飼養頭数は少ない。渡島地方で飼われている肉牛は褐毛和種(あか牛)が中心で、全道のあか牛の85%がこの地方で飼われている。又、この地方で肉牛飼養農家の最も多いのは大野町で、七飯町がこれに次いでいる。そして、一戸当り飼養頭数が10頭未満の農家が多く(67%)、その内容は水田と繁殖肉牛の複合経営が主体であることが読みとれる。

以下、見学先の内容を順に振り返ってみよう。

### 1) 沢村農場

国道227号線を大野川に沿って進んで行くと右手に木地挽山があり、沢村農場はそこから大野川を渡ったところにある。米、乳、肉の複合経営をやっている農家で、この地方の典型的な経営形態の例である。

筆者らのを含め3台の乗用車が湯の川からバスの後について行ったが、途中でバスを見失って到着が遅れた。このため乗用車が現地に着いた時にはバスの一行は見学を終っていた。そこで、この項は、この農家の営農計画書や、実際に見学した参加者の話をもとにまとめた。

搾乳牛3頭、肉用牛成牛7頭、子牛4頭を所有しており、牛乳は年間12t、肥育素牛7頭を生産するという営農計画であった。土地は約6町あるが、水田1.7町、採草・放牧地は1反しかない。極めて小規模な畜産経営であるが、年間総生産額は630万円の計画で、そのうち牛乳と肉牛の販売

で300万円を見込んでいる。

肉牛はあか牛で、成牛7頭のうち放牧に預託しているのは2頭だけ。頭数は少なく、資質のよい牛を生産するという考えで、マキ牛交配にたよる放牧預託よりも人工授精でという方針らしい。肉牛も乳牛も頭数が少ないので施設・設備費は少なく済んでいる。ミルクカーは1台、畜舎も小さいものが2棟。外見をながめただけであるが、決して派手さは感じられない。敷地のすぐ裏手は山地であり、東北地方の小さな農家を連想させるたたずまいであった。

## 2) 大野町公共育成牧場

大野町有牧野は三地区で構成されており、今回見学したのは木地挽地区である。51年から草地造成が開始され、58年完成の計画で507haの草地改良が現在進行中であった。草地利用の目的は肉用牛の預託放牧であるが、冬期舎飼預託も計画され、現在そのための畜舎を建設していた。

採草地在110haあってヘイレージや乾草を調製し、乾草は1kg30円で農家に販売している。

現在放牧されている肉牛は繁殖牛440頭、哺育牛320頭で、その99%があか牛である。牛群は6群に分割され、繁殖牛群は1群70頭平均で構成し、種雄牛を1頭づつ入れてマキ牛交配を行なっている。造成された草地は200haと全体に占める割合はまだ小さく、1群の牧区構成には牧草地、野草地、庇蔭林が含まれるよう設定しているという話であった。草地は起伏が多く、先の大雨で崩れたところもあったが、青空の下でみる草地は美しく、牧草のはえ方にはムラがないように見えた。放牧は、昨年では5月10日から11月30日まで行なったということで、その長いことに驚いた。

前述の牛舎施設は150頭収容を目標にした牛舎1棟、スチールサイロ2基、スラリーストア1基である。冬期預託牛の糞尿を貯めるスラリーストアは800㎡、210日分の容量で設計されていた。牛舎は680㎡で、建設費9,300万円と聞いた時、見学者一同驚きの声をあげた。長尺カラートタンの屋根、サッシュの窓枠、壁はセラミックブロックを使用しており、立派な外観であった。

豊かな草生の放牧地にあか牛がのんびりと草を食べている光景は観光地としても通用するほどであった。これに見合った畜舎ということでは必然性があるのかも知れないが、公共育成牧場の施設ということ、或いは沢村農場、道南ファームそして山川牧場の畜舎と比較して考えると、奇異にさえ感じられる。

## 3) 道南ファーム

道々大沼公園―鹿部線を行くと七飯町と鹿部村境に道南ファームの牧場があって、周囲は小高い丘でかこまれていた。

昭和52年に設立、現在、社員は10名で、肉牛、馬などを飼養している。

場長の福井氏の説明によれば、乳雄の育成牛と肥育牛がそれぞれ約490頭、肉専用種が繁殖、育成牛を合わせて180頭飼われており、肉専用種は黒毛、あか牛、短角、アングス、ヘレフォードと種類が多い。馬は挽馬生産を目標にしているが、実質的には肉用馬となっている。

乳雄牛の飼養は年中舎飼で行なわれており、床面の乾いた吹き抜き牛舎の中に栄養状態のよさそうなホル雄が多数飼われていた。

肉専用種と馬の成雌は年中屋外飼育、夏期は放牧という方針で、放牧地が農場から5～6km離れ

たところであって、我々は見ることができなかった。説明では、土質が火山灰地なので、肥培管理するよりも放牧のみに使った方が有利と考えているようであった。しかし、資料によれば、堆肥散布、追肥などを行ない、458頭・日/haという牧養力を保持している。放牧日数は年間220日以上を見込んでおり、この数値は先に見学した公共育成牧場でも近い数字であった。道東などとの気候条件の違いが感じられる。

給与する粗飼料は乾草のみで、サイレージ類は与えていない。畜舎は吹き抜き形やD形畜舎など色々であるが、いずれも建築費を安くあげていることがうかがわれた。資料に載っている吹き抜き形牛舎の建築費は1㎡あたり4,000～11,000となっている。

前にも述べたように牛舎内の乾燥状態は良好で、敷料にはバークを用いていた。小樽から購入しているという敷料代だけで年間1,000万円かかるとの話に、改めて敷料の問題を考えさせられた。しかしながら、環境条件をよくして、事故率ゼロに抑え、よい肥育成績をあげている技術水準はかなり高いものと思われる。

#### 4) 山川牧場

山川牧場は大沼公園の近くに位置し、周囲には民家もかなりあった。若い兄弟が隣接した敷地で酪農と肉牛を、それぞれ独立して経営していた。見学したのは肉牛牧場で、ホルシュタインの育成・肥育を行っていた。経営主の山川(弟)氏の話には、色々の工夫を組み合わせ、小規模で合理的な経営をしていることの自信が感じられた。

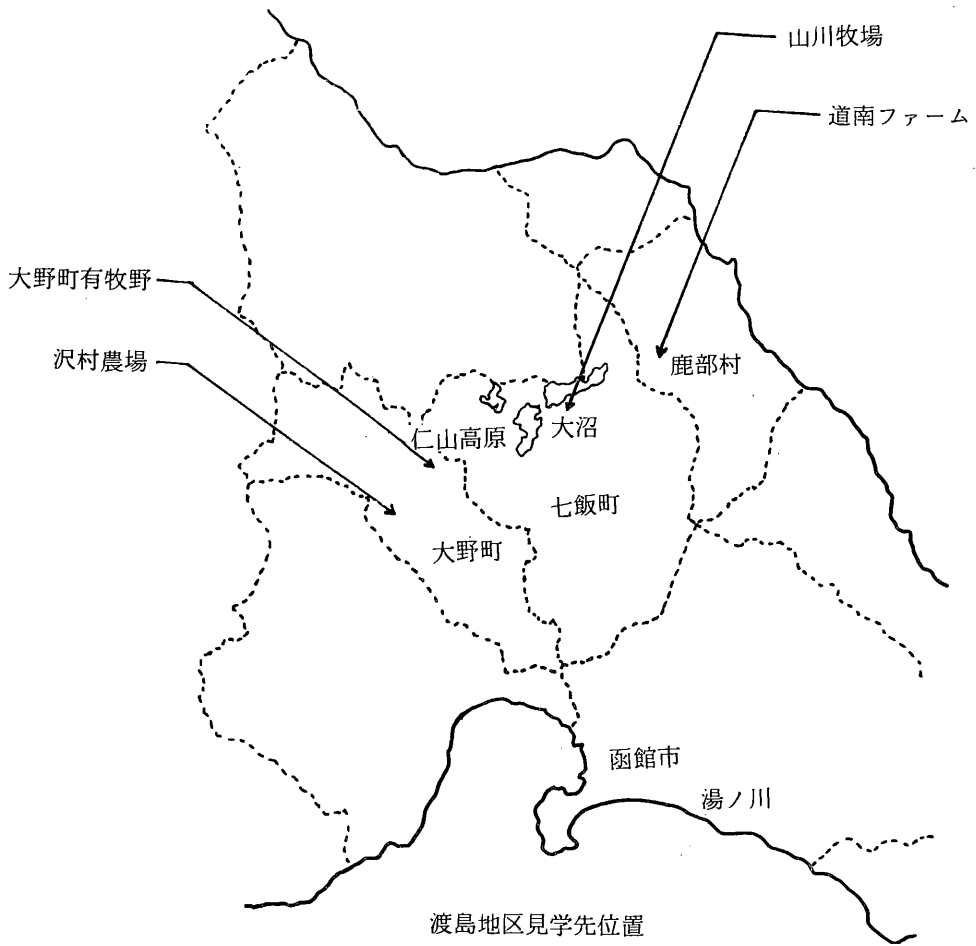
牡犊を1ヶ月齢時に導入し、7～8ヶ月齢300Kgの素牛を生産する。この素牛を日本ビーフという会社で買い上げてもらい、20ヶ月齢で650～700Kgまで肥育し、その預託料をもらうという形式で経営の安定化を計っている。

飼養頭数は子牛、肥育牛それぞれ150頭。所有地5.5haは貸出して、粗飼料を全く生産せず、乾草やサイレージを必要に応じて購入している。労働力は夫婦2人の実習生で労働力2.0人と少ないことを考えると、このやり方は賢明ということになる。又、導入子牛には、双子やフリーマーチン等を1頭15,000円程度で安く買入れ、生産費の軽減を狙っている。

敷料には、水田農家から堆肥と交換で入手した稲ワラを用いていた。畜舎は哺育牛舎と肥育牛舎各1棟、カーフハッチ70個をもっていた。肥育舎は590㎡の吹き抜き形で、400㎡のたい肥盤と合わせて600万円の建築費で済ませている。

ハッチはコンパネのサイズをそのまま利用しているので若干小さい。常時使用するのは半数で、残りは乾燥させるために開けてある。間隔をあげずに置いても吸い合いをしないような工夫など知識や経験が活かしていることを思わせていた。全期間を通しての事故率は8%と高く、特に冬季間ハッチから哺育舎に移すと多発しているようであったが、山川氏自身はあまり気に止めていない様子であった。

こうして、4ヶ所の見学を終えてみると、和牛より乳雄飼養農家の方が多かったが、放牧期間の長さや、吹き抜き牛舎でビニールカーテンによる開閉の調節などに道南と道東の違いをみることができた。しかし、それにも増して肉牛飼養の形態がいかに柔軟性があり、個々の農家のおかれている土地、労働力、環境、資力などの条件によって様々に変え得るかをこの目で見ることができたのは大いに勉強になった。



山川牧場のカーフハッチ